

中ソ友好交流をめぐる中国青年知識人の プロパガンダ受容について

青年 S の日記を手がかりに

鄭 成[†]

The Chinese Young Intellectuals' Reception of the Propaganda on Sino-Soviet Friendship:

A Young Man's Psychological Trajectory

Cheng Zheng

This research explores how the young Chinese intellectuals confronted and gradually accepted the official ideology during the early 1950s by focusing on one college student's psychological trajectory. During the 1950s, the newly established CCP government launched a series of ideological propaganda campaigns including the propaganda on Sino-Soviet friendship. Such propaganda exerted significant influences on the remaking of the people's mind and the legitimization of socialist ideas. Young intellectuals were also greatly impacted by the ideological propaganda. Yet, their acceptance of the ideological propaganda revealed more complexity in terms of the factors such as education background, cultural status, and personal values. The investigation on such complexity and its causes can inform how the Chinese people maintain their psychological independence in front of the powerful ideological propaganda.

はじめに

本稿は、1950年代建国初期における中国共産党政権（以下、中共政権）の強力なプロパガンダの、民衆による受容過程を考察するものである。その目的は、強力なプロパガンダが進められる中で、民衆の思想上の主体性がいかに維持されたかを探ることにある。

1950年代、成立して間もない中共政権は、思想の画一化を目指し、全国規模でプロパガンダを展開した。一連のプロパガンダは、巨大な政治的圧力を背景に、瞬く間に社会に浸透し、民衆を従順な群衆ならしめ、建国初期の思想統制の強化に大いに貢献した、というのが通説とされている。建国から文化大革命に至るまでの、政治運動が激化する軌跡を辿ると、先の通説は確かに歴史の一面を捉えているとすることができる。一方で、重要な点を見落としてはいまいか。それは、民衆の主体性である。建国以降の歴史をより長期的な視点で眺めると、強力なプロパガンダが展開される中であって、民衆が必ずしも思想上の主体性を失ってはいなかったことがわかる¹。むろん、主体性が奪われた時

[†] 早稲田大学社会科学総合学術院

期もあれば、意識の深層に閉じ込めていた時期もあるだろう。そうだとすれば、民衆の主体性は、時代に翻弄され揺れ動いていたと捉えた方が、より実像に近いのではないだろうか。

こうした観点から、国家と個人の相互作用に着目し、社会主義体制の特徴を把握するためには、中共政権のプロパガンダの下での民衆の主体性について考察し、その内実を究明することが重要な研究課題として設定される。

上記の研究課題に取り組むために、以下では中ソ友好交流を切り口として、民衆の思想上の主体性を解き明かすことを試みる。

中ソ友好交流は、中共政権が1950年代を通じて実施した、プロパガンダの一部を成すものである。「交流」と称しながら、その実、中共政権がソ連の国家建設の経験や国民生活を社会主義国のモデルとして位置付け、民衆に紹介することによって、ソ連一辺倒の気運を高めようとしたプロパガンダであるため、一方通行の性格が強い。それゆえ、一部の研究者からは「中ソ友好宣伝教育運動」と称されているほどである²。ただし、歴史用語として定着しているという客観的状况と、歴史史料や先行研究との整合性を図るために、本稿では「中ソ友好交流」という表現をとる³。

中ソ友好交流に関する先行研究は、二種類に大別することができるが、いずれもプロパガンダを解説することに主眼が置かれている。一つは、実施機関や各種イベントを対象とするものである。具体的には、中ソ友好協会を中心に扱うものや、ソ連関連のプロパガンダ全般を扱うものなどがある⁴。こうした研究は、豊富な史料を提示することによって、中ソ友好交流全体の流れを描き出しているという特徴がある。もう一つは、中国に紹介されたソ連文学と映画を対象とするもので、作品の内容分析に研究の主軸が据えられている⁵。ただし、これらの先行研究では、中国の民衆によるプロパガンダの受容が体系的に検討されていない。そればかりか、強力なプロパガンダを民衆が従順に受け入れたという、研究者の歴史観さえ透けて見える。

他方、中共政権側からの働きかけだけでなく、民衆の受け入れまでを射程に入れた研究も存在している。余敏玲と姜超は、強力なプロパガンダが民衆による対ソイメージの大転換をもたらしたという従来の見解を認めながら、ソ連に対する懐疑的な見方も根強かったことを指摘する。この指摘は、中ソ友好交流が実施された前後における民衆の対ソイメージを基にしたものだが、入口調査と出口調査のデータ比較という様相を呈している⁶。

こうした知見を踏まえた上で、次に挙げる二つの観点から、民衆によるプロパガンダの受容を動態的に読み解いていきたい。一つは、中共政権からの発信と民衆による受容の相互作用があって初めて、中ソ友好交流が成り立つということである。事実、中ソ友好交流を進めるにあたり、中共政権は常に民衆の反応を確かめながら、対策を講じていた⁷。したがって、政策の意図を正確に理解するためには、民衆側の受容の諸相を把握することが肝要なのである。

もう一つは、強力なプロパガンダ下に置かれた民衆の主体性への着目である。民衆の主体性に関して、これまでの研究では、服従するか、それとも抵抗するかが議論されてきた。こうした対立的な捉え方は一面的で、民衆の主体性の多様さを見落としてしまっている。

民衆によるプロパガンダの受け入れ方は、個人の経験や社会認識によって本来的に異なる。1950年代も例外ではない。国民一人一人の認識が国家の推奨するイデオロギー理念とぶつかり、相互作用した結果、多様な受け止め方が民間社会に存在するようになった。当時の厳しい政治雰囲気、こう

した多様な受け止めた方が公にすることができず、一時は各自の心の奥に潜めていたことだろう。いずれは人々の意識の底流をなし、社会を牽引することになった⁸。したがって、民衆の主体性を考察するに際し、こうした価値観の多様性がその一部だとすれば、いったいどのようにして形成されたのかを把握することが重要となってくる⁹。

こうした立場から、以下では青年知識人に焦点をあて、中ソ友好交流をめぐる意識の変容を追い、当時の民衆によるプロパガンダの受容を動的に読み解いていく。動的にとは、人々の意識は変化し得るものであるということを前提に、プロパガンダを受け入れて行くダイナミズムを描写することを意味する。この点で本稿は、余と姜が交流前後の変化を単線的に比較してみせたものとは異なる。中ソ友好交流をめぐる、これまで筆者は主に中共政権の各種イベントや出版物の内容を分析対象としてきたが、本稿よりアプローチを移行させ、民衆の意識に照射していく¹⁰。

1. 研究方法

1950年代初頭、上海のH国立大学に在学していた青年S氏（以下、青年S）の日記を基に、建国初期の政治運動に触発された経験を整理した上で、同氏がソ連友好交流を通じたプロパガンダを受容して行った過程について考察する。当時、中国の大学生は人数が非常に少なかったため、青年Sのような若い大学生は、社会のエリートと見なされていた¹¹。

青年知識人を研究対象にするのは、先行研究の偏りを一因としている。これまでの関連研究は儲安平、徐鏄成、馬寅初のような著名な知識人に集中しており、青年知識人はほとんど取り上げられてこなかった¹²。しかし、社会的地位や人生経験の点で、青年知識人は著名な知識人と大きな隔りがある反面、彼らは進取の精神が強く、当局が掲げたイデオロギーに突き動かされやすい面がある。また、将来的に彼らが社会の主導的役割を担うことになる存在であることも忘れてはならない。

次節以降、青年Sの生活環境、パーソナリティ、価値観を把握した上で、以下の二つの側面について考察を展開する。

1) 政治運動への参加経験

2) ソ連友好交流の受容

1) は、青年Sによる政治運動への参加経験を通じて、ソ連文化を用いたプロパガンダと出会った際の精神的基盤を明らかにするものである。当時、青年知識人は漏れなく三反五反運動、思想改造などの一連の政治運動に巻き込まれ、数々の修羅場で精神的衝撃を受けることにより、意識に変化が起り始めていた。したがって、彼らが共有する経験は、ソ連友好交流を通じてプロパガンダを受け入れる際の、精神的基盤を形作っていたと考えられる。

2) は、ソ連文化を用いたプロパガンダに対する反応を手がかりに、青年Sがいかにして受容して行ったかを明らかにするものである。ここで、論点を二つに絞って考察を進める。一つは、最初の対ソイメージである。当時、上海の大学生の多くは、西洋近代型の教育を受け、欧米文化に慣れ親しんでいた。したがって、ソ連を称える国家主導のプロパガンダに初めて接触した際に、どのような印象を持ったかが鍵となる。もう一つは、青年知識人たちの対ソイメージを変えた要因である。先行研究において、大勢の知識人が当初ソ連に違和感を覚えたにもかかわらず、中共政権の宣伝論調にやがて同調するようになったことの原因として、プロパガンダの効果が挙げられていることは、前述の通り

である。しかし、この解釈には個人の視点が欠けている。そこで本稿では、青年Sという個人の視点から歴史の真実を逆照射してみたい。

分析に用いるのは、青年S直筆の日記である。日記は、1951年から1959年までの10年間分が現存しているが、そのうち1951年と1952年の二年分に対象を絞ることとする。この時期は、一日当たりおよそ500字前後でまとめられているが、日によっては3倍から4倍の長文もある。内容は日々の学校生活、家族の出来事、身の回りで起きた政治運動と、かなり広範に渡っている。青年Sは紡績学専攻の理系学生だが、文才があり、日記の中でこうした客観的事実を克明に記録するだけでなく、自分自身の意見や感想も綴っている。そのため、青年Sの日記からは、彼を取り巻く当時の社会状況、心境の移り変わりだけでなく、同世代の知識人の様子も垣間見ることができる¹³。

2. ライフスタイルとパーソナリティ

青年Sは、上海の裕福な家庭に生まれた¹⁴。初め、上海市内の某工業専門学校に入学するが、1951年9月にH国立大学へ編入している。父親は私立工場の技術者で、賃貸物件を所有していた。友人からも中流以上のライフスタイルを享受し、優雅な文化志向を持つ者が多い。

青年Sは、経済的に恵まれていたこともあり凝り性だった。例えば、スーツはオーダーメイドで新調することがほとんどで、TPOに合わせて洋服を選んでいる。ある時は、市内の商店をくまなく回り、半日をかけて一足の革靴を探すこともあった。大学在学中は入寮生活を続けながら、数日ごとに必ず市内の実家に戻り、食事を楽しんでいる。

趣味も多く、専門学校在学中は一時、社交ダンスにのめり込んでいた。女性の品定めも、ダンスパーティーの楽しみの一つだったようである。しかし、社交ダンスに没頭しすぎたため、家族から幾度となく警告され、未練を残しつつ止めることになっている。ダンスの才能を再び発揮する場を得るのは、大学編入後に舞踏サークルのリーダーを務めるようになってからのことである。また、映画鑑賞も好んでおり、映画館に頻繁に出かけている。1951年以降、アメリカ映画と入れ替わるようにして、ソ連映画の上映が増加した。話題の映画を鑑賞した日には、日記に感想が綴られることが多い。そうした感想は、ソ連映画と青年知識人との出会いを理解するための重要な手掛かりとなる。

容姿は比較的文科系に近く、長い間、自分の体型に対してコンプレックスを抱いていたようである。19歳の頃は、身長164.5cm、体重48.3kgと、決して逞しい体格と言えるものではなかった。そこで、肉体改造の一環として、牛乳を大量に飲み、朝はランニングに励むようになる。日増しに分厚くなっていく胸板について、喜びを露わにした記述がある。自分の成長に一喜一憂する、素直な心を持つ若者の姿がここから窺える。

また、向上心に溢れており、学業に関しても多く書き記している。その内容は、出席した講義のメモや教員に対する評価から、学習の進捗状況、試験結果まで多岐に渡り、学業に対する真剣さが滲み出ている。専門学校在学中は微積分が苦手だったため、多くの時間を割いて猛勉強している。その勢いに乗って受験勉強を続け、最終的に国立大学への編入を果たしたのである。大学編入後は勉強中心の生活を送り、トップクラスの成績を取めている。

人生観の支柱には、二つの価値観があった。一つは、立身出世を唱える中国の伝統的価値観である。そもそも大学への編入を目指した一番の動機は、高いレベルの教育を受けることであった。編入試験

の合格通知を受けた当日には、「これから社会を生き抜くには、今のうちに一生懸命勉強しなければならない」と覚悟を語っている。この一文はまさに、立身出世という価値観を象徴したものである¹⁵。後に政治運動に積極的に関わろうとしたのも、こうした価値観に由来したためと考えられる。また、政治運動に躓いた際、速やかに身を引いて学業に専念し、技術家を目指そうと決意を新たにしたりしたのも、出世意欲の表れの一つでもある。

もう一つは、自由を謳歌する欧米的な価値観である。青年Sは一時期、日記で英単語を頻繁に使用することがあった。西洋近代文明の影響下にある上海で生まれ育ったこともあり、日常的に欧米の文化に接触し、無意識に欧米風のライフスタイルを送っていたためであろう。

総じて言うならば、1951年時点の青年Sは上昇志向があり、中国の伝統的価値観と欧米の近代的価値観の影響をともに受けていたということである。また、粘り強い反面、一時の気分流されがちな、若者らしさも備えている。

青年Sのライフスタイルとパーソナリティは、個人的なものでありながら、同世代の若者にも共通するところがある。当時の上海で、多くの若者が欧米起源の大衆文化に親近感を覚える一方、中共政権のイデオロギーへの馴染みが薄かった。

3. 政治運動への参加経験と精神的衝撃

1951年から1952年にかけての二年の間、政治情勢の変化に伴い、青年Sの政治認識と立場も変容を続けていた。

3.1 1951年の政治認識と立場の変化

1951年7月までの専門学校在学中は、政治から距離を置くようにしていた。政府のプロパガンダに対して、感情が高ぶることもあったが、呼応するような行動は起こしていない。ところが、9月の大学編入を機に、当局の公式見解に傾倒していく。

青年Sの同年前半の政治的立場は、朝鮮戦争の受け止め方に集約的に表れている。朝鮮戦争真っ只中の1月、近所に住む男性の入隊を知ると、非常に勇氣ある行動であり、これぞ新中国の立派な青年だと日記で褒め称えた¹⁶。ところが、3月に開催した志願兵代表の送別会へは、出席を控えている¹⁷。また、戦況を伝える政治学の講義に言及はするものの、わずか一行のみであった。当時の中国社会の最大の関心事が、朝鮮戦争であったにもかかわらず、三箇所で触れるに留まっていることとその記述内容から、青年Sが新しい政治情勢に興味を示す一方で、すぐには関わろうとしない様子が伝わる。

青年Sが新政権の動きと距離を取ろうとするスタンスは、急進的な政治手法に不信感を抱いていたことと関連する。彼は4月の日記に、次のような疑問を呈している。「この一週間、各地で反革命を鎮圧する運動が大々的に展開されている。良いことではあるが、(政府の呼びかけに応じて)出頭した人に対して、政府が新たに罪を隠蔽したとか、罪が大きいなどを理由に、(出頭時の約束を)取り消すようなやり方は果たしてよいのか。」¹⁸

前年の1950年10月より、中共政権は「反革命鎮圧」運動を起こし、国民党の残留勢力の摘発に乗り出している。上海市政府の初期対応は、該当者が出頭すれば深くは追究しないという、比較的緩やかなものであった。後に毛沢東の指示を受け、上海の反革命鎮圧が急進化しはじめ、逮捕された人

数が急増した。1951年末までに、法的手続きを踏まえずに処刑された者は2000人近くに上った。一方で、死刑に該当しない者も多数存在した¹⁹。反革命鎮圧の急進化を以って、社会統制を強化させるという中共政権側の思惑が、ここに見え隠れする。結果的に、社会全体には恐怖が蔓延した。このような惨状を目の当たりにして、青年Sは日記に当局への懐疑を吐露している。

不信感を持ちながらも青年Sは、大学主催の集会やデモへの参加は控えなかった。しかも、現場の雰囲気や飲まれ、気持ちが高揚する場面もしばしばあった。例えば、5月1日には大規模な集会に参加し、H国立大学の旗手を務め、大きな赤色の旗をなびかせながら、街頭を一日中練り歩いたことがあった。また、ベルリンの国際集会から帰国した、少年先鋒隊代表の少女の体験談を聞いた9月26日には、「祖国の国際的地位は向上した。そして、高いプライドを感じた」という。国慶節の10月1日、デモから帰った後には、「政府と人民の力を改めて認識できて、毛沢東時代を生きる中国人は実に光栄だ」という感慨に耽けている。これらから窺い知れるのは、集会やデモが独特の雰囲気を醸し出し、青年Sのような若者が徐々に感化されていったということである。

1951年下半期に入ると、青年Sの政治認識は、中国政府の公式見解に近づくようになる。10月24日、とある展示会を見学し、「昔の反動的な神父らはまともな人間ではない。彼らは宗教を笠に着て、スパイとして中国人民の革命事業を妨害しているのだ」として、宗教に対する憤りを日記にぶつけている。11月5日には土地改革の展示会を見学し、「地主の悪がよくわかった。農民の血で染まった服が地主の罪をよく暴いてくれた。地主らは全員処刑するべきだ」と、激しい口調で地主を糾弾した。これほど容易に、外国人宣教師と地主に対して憎しみを抱くようになったのは、青年Sが都市富裕層出身の学生であるために、宣教師の活動実態や農村の現状をよく知らないことが大いに関係している。いずれにせよ、展示会の主催側の立場からすれば、展示会は所期の目的を見事に果たしたと言ってよいだろう。

1951年9月の大学編入を機に、青年Sは政治活動に本格的に関わり始める。二箇月後の11月には、共産党青年団（以下、共青团）への入団を申し出ている。この頃の青年Sは、「基礎的上層建築」などの中心的概念が理解しづらいと嘆くほど、マルクス主義理論についての理解はまだ浅いものだった²⁰。入団の申し出は、政治への関心が高まった証の一つである。その背景に、H国立大学の共青团の活動が充実していたことや、濃厚な政治的空氣が漂っていたほか、入学前の集会やデモ、展示会への参加経験もモチベーションになったと推察される。

もともと青年Sは家庭環境、上海の社会・文化、中共政権の支配期間などの関係で、政治に特段の関心があるわけではなかった。H国立大学入学後、社会主義イデオロギーと現実の政治に対する理解が伴わないまま、周囲の雰囲気に流されるうちに関心が高まり、共青团入団を以って実際に政治活動に関わって行こうとしたのである。ところが、翌年の1952年に、厳しい試練が待ち構えていた。

3.2 1952年の政治運動の試練

1951年12月、中国政府は朝鮮戦争中の汚職、浪費、官僚主義の摘発を掲げる三反運動を発動した。続く翌年1月には、民間企業に存在する贈賄、脱税、情報漏洩、手抜き工事、公共財の窃盗など、増産と節約の妨げを摘発する五反運動へと発展する。二つの運動は社会を激震させ、忽ち重苦しい政治的空氣をもたらした。これに先立ち1951年9月には、「思想改造」と呼ばれる知識人の思想・言論統制が施行されている。

H 国立大学では、思想改造と三反運動が、それぞれ 1952 年 3 月と 6 月より始まっている。二つの運動が合流するや、青年 S は厳しい政治的試練に直面することになる。運動の初期、青年 S は五反運動の一環として父親が勤務する工場に赴き、資本家の説得工作に乗り出すほど意気込んでいた。やがて、未曾有の事態に瀕し、青年 S は落胆と高揚を繰り返すという、精神的起伏の激しい日々を過ごすことになる。そこで以下、政治運動における青年 S の苦難の歴史を辿り、政治運動から受けた精神的衝撃を焙り出したい。

青年 S の精神構造に最も大きな衝撃を与えたのは、思想改造であった。思想改造は、中華人民共和国建国前後の数年間に渡り、知識人を対象に実施された政治運動で、マルクス主義を信奉し、共産党のリーダーシップを受け入れるよう指導するものである。

初期の思想改造は、知識人の自発的学習と反省が主体であったが、朝鮮戦争による国際情勢の緊張化を受け、次第に厳格化して行く。建国初期は、集団学習会で繰り返行われる自己批判と、高圧的な雰囲気の特徴とし、多くの知識人に強力な政治的圧力を加えた。こうした政治的圧力は二箇月間の思想改造を経た後、上海の私営新聞『文匯報』の経営者である嚴宝礼は、公私共同経営化を進んで申し出ているようなことが続出したほど、相当の効果を挙げた²¹。

当時、大学当局が思想改造を進めるにあたり、主な課題が三つあった。一つ目はアメリカを崇拝し、ソ連に反対する風潮を改めること、二つ目は個人主義を改めること、三つ目は技術屋的な発想を改めることである²²。

H 国立大学の思想改造は、時期的に三反五反運動と重なっていたこともあり、三反五反運動の自己反省と自己点検、個人主義を改めることが運動の中心となっていた。その中で、青年 S を最も悩ませたのは、個人主義志向を否定することであった。

H 国立大学の思想改造は、副院長の動員報告を以って 1952 年 3 月 28 日に開始する。動員大会で、毎週 8 時間以上を理論学習に充てるという、副院長の指示を耳にした青年 S は、違和感を覚えつつも、思想改造を前向きに捉えようとした²³。4 月 18 日の五反運動発起大会の際には、一部の学生の言動に嫌気が差すが、周囲から浮いていることに気付き、自らの態度を改めようと心がける。それ以降も、なるべく思想改造に協力的であろうと努めている。

4 月 22 日の集団討論の場では、五反運動を支持していることを示すために、青年 S は家族に対する説得工作を名乗り出る。この意思表示は、同級生から大いに評価された。説得工作のために帰宅する日には、多くの同級生に大学の正門まで見送られ、たくさんの激励のメッセージをもらい、感極る場面があった。そして、帰宅するなり情報収集や関係者への説得工作に熱を入れる。こうした行動を支えたのは、祖国の財産を守るという決意だったと、日記にしたためている。説得工作の一環として、青年 S は会社にまで乗り込んだことがある。その際、「組織から一任された自分は、五反運動を担当している」と先方に伝え、嚴重な警告を発している。ただし、その会社がどのような問題を抱えていたかについては、日記に関連の記述がない。青年 S の行動は動かぬ証拠を突き付けて是正をはかるといよりは、圧力をかけるためのものだったと見られる。こうした積極果敢な姿勢が評価され、青年 S が全学の代表として、五反運動の報告役を任される。このことは、彼自身を一段と鼓舞した。

ところが、事態はそれから変化する。5 月 22 日、7 時間に及ぶ思想改造の集団討論が行われ、青年 S は参加者全員から批判を受けたのである。その場では、批判を素直に受け入れることに努めた。そ

して、自分の思想に問題があるとして、徹底的に自己改造することを次のように誓う。「自分の最大の欠点は自己満足であり、その小さな自我を否定することで初めて、祖国の偉大さを認識することができる」。こうして思想改造における最初の難局は乗り切っている。

6月4日、H国立大学の三反運動が幕を開ける。青年Sは小組長に任命され、より一層士気を高めている。この頃の日記には、「社会主義のために」という表現が、頻繁に登場するようになる。使命感に燃えた青年Sは、父親の政治的関心が低いことを問題視し、父親の意識改造まで試みようとした²⁴。

しかし、間もなく壁にぶつかる。大学の集団討論がますます過熱し、自己批判の方法が徐々に固まっていくにつれ、自分の思想を包み隠さず全て報告することに、青年Sが強い精神的負担を感じるようになったのである²⁵。それでも、大学の三反動員報告を聞き、「徹底的な自己批判こそ、真の進歩に繋がるものだ」として彼は意を決する²⁶。この頃、馮契教授による政治学講義の際の発言は、青年Sに大きな影響を与えた²⁷。「徹底した自己批判は真の愛国主義だ」、「あるクラスで徹底した自己批判が行われた。その後は思想改造がうんと楽になった」という言葉に感銘を受け、謙虚な態度で自己批判に臨む覚悟を決めたのである²⁸。そして、三反運動における初めての自己批判は無事に終わっている²⁹。

この時を境に、青年Sは自己批判に徹し、公の場において不適切な言論がないように気を付けるようになった。「今後は不満があっても、すぐに上級組織に異議を申し出るようなことはしない。」³⁰、「自己批判に違和感があったのは、自分のメンツを大事にするためだ」³¹と絶えず自分を戒めている。

二度の自己批判（思想改造と三反運動各一回）を懸命に乗り越えていく一方で、その都度莫大なエネルギーを要したことから、共青团入団に発した青年Sの政治的意欲は減退し始める。時を同じくして、父親が勤務先で行政処分を受けたとの知らせが、6月29日に届いている。これらを機に、政治から遠ざかり、学業に専念したいという思いが日増しに募っていく。

自己批判で悲惨な経験をした青年Sは、父親に同じような苦しみを味わわせたくないと思い、父親の勤務先の工場長に手紙を送り、文章による自己批判を認めてもらうよう嘆願した。

大学の三反運動は依然、止まるところを知らない。三反運動の検査が行われた7月5日、青年Sは同級生とともに、学内の食堂を任せられる。それは、食堂の備蓄米の計量や厨房の食器棚の検査を行うもので、心と身体を酷使するものであった。一日の業務を終え、日記には「大変疲れた」と嘆くだけで、三反運動の意義を考えようとはしなかった³²。

精神的・肉体的エネルギーを猛烈に消耗する中で、青年Sを唯一奮い立たせたのは、大学からの激励であった。ただし、激励は決して業務を質・量ともに軽減させ得ない。

複数な気持ちが交錯する中、青年Sは再び自己批判の時を迎える。7月27日、思い切って徹底した自己批判を行い、専門学校在学当時、社交ダンスに熱中していたという生活面の問題まで白状し、翌日の集団討論でも自己批判を続けた。このように繰り返される自己批判に加え、同級生からも集中豪雨さながらに、強烈な批判を浴びせられるのである。それらは精神的重圧となって、青年Sにのしかかった。遂には、「毛沢東主席を前に、自分に染みつけた汚れをどうすれば完全に除去できるか」と嘆くようになり、深い罪悪感に苛まれていた³³。

ここへ来て、あるジレンマが青年Sの前に現れた。自分自身と他者からの批判に抗わず、全てを受け入れようとする、たちまち全人格が否定されることになる。一方、反論しようものなら、一層の

攻撃は免れ得ない。ジレンマに陥った青年 S は、次第に精神的余裕を失い、終ぞ自己否定することを選んだ。日記でも、「自分はわがままな性格だ。嬉しい時は同級生とよく冗談を言うが、嬉しくない時は、人にいっさい声をかけない。まったく坊ちゃん性格だ。同級生と疎遠になってもおかしくない」と、自分をとことん責めている。一連の悪言が尽きると、「今後は黙るようにする」と宣言した³⁴。

ところが、同級生からの批判によって、いとも簡単に沈黙は破られる。8月6日の集団討論で、数々の不服を口にしたところ、学内の共青团組織部長から「思想的に立ち後れている」という厳しい叱責を受けてしまったのである³⁵。青年 S の中に、不満と後悔が去来する。激しい葛藤が心に渦巻いた結果、青年 S は攻撃的になった。まず二日後の批判会で、同級生に対し、人一倍厳しく批判することで仕返しをする³⁶。さらに、8月11日の Z 教授の自己批判会で、Z 教授の誠意溢れる態度に心を打たれたながら、同情的気持ちを覚えた自分を温情主義として批判を加えている。この頃の大学は、厳しさが更なる厳しさを誘発し、峻烈な相互批判が絶えずエスカレートしては、止まるところを知らなかった。

自分が責め立てられるほど、報復するように他者を追い込もうとすることに、青年 S は嫌気がさすようになる。そこで、政治活動から足を洗い、技術者として祖国に貢献したいという思いが再び募り³⁷、思想改造に幻滅した³⁸。8月14日の集団討論で、青年 S は自分を批判する同級生と激しく対立した。ひとまずその場で、彼は周囲の意見を真摯に受け止めようとしたが、自分だけが槍玉に挙げられ、針の筵にされたという気持ちを拭うことができなかった³⁹。

不平不満は、16日の自己批判会で遂に頂点に達する。批判的な発言が続き、三時間の応酬の末に青年 S は激高し、「批判意見が正しいものだとすれば、自分はもはや人間とは言えない」との怒りを日記にぶつけている。一方、猛烈な批判を仕掛けてきた同級生の ZT 氏に対しては、入団申請のため政治資本を稼ごうとしているだけだと、実に冷ややかである。また、同級生の中に「政治的地位を目指して投機的に入団した人もいれば、女遊びに興じる人もいる」と、醒めた目で周りを見るようになる⁴⁰。

四カ月に及んだ思想改造運動が、8月25日に H 国立大学で幕を閉じた時、青年 S が書いた「青年の特徴は自己改造に進んで挑むことだ」という個人総括の一節が、全学学生委員会の黒板に掲示される。また、彼は日記に思想改造を経た後より大きな視点で物事を捉えることができるようになったと、自分の収穫を述べている⁴¹。直前の8月22日、大組批判会でも、落ち着いて対応している。こうして、青年 S は思想改造から得た経験をすべてポジティブに読み替えられたかのようであった。

しかし、思想改造運動が青年 S に与えた精神的衝撃は消えることがなかった。運動終了後、H 国立大学はすぐに夏休みに入る。この間、青年 S は一人で思索を続けているうちに、思想改造の影に気が付いた。9月10日には、「時代の流れに乗じて、高い地位を狙うために人を蹴飛ばす人がいる。父親の工場にもそんな連中がいた。父親への説得は実は失敗だった。これから父親を慰めよう」と、自分の失敗を素直に認めている。しかし、出口が見つからないという苦悩が続く。「これまではいくら模索を重ねても、真理まで辿り着くことがなかった。自分のことがよくわからない。どこから着手すればいいかわからない、かかった病が何なのかさえわからない。何をもちて治療に当たればいいのか、どんな注射が必要なのか、どこにメスを入れるべきか、どうすれば後退を防いで自分を強い人間にさせられるのか、全てがわからない」と、日記に綴った言葉は、その時の心境を物語っている⁴²。

苦悩の末、青年 S は自分のパーソナリティ、現状認識を問題の所在として否定した上で、プロパガンダの理念に縋り、出口を求めようとした。「自分は個人と集団の関係をよく理解していない。集団より自分の方を大事にしている。理想、前途、英雄、社会発展の規則などの意味をよく掴んでいない。自分の性格は時に舞い上がった時、時に何かを言われただけでドン底に落ち込んだりする。まったく病人だ」。さらに、「偉大な祖国、社会主義、共産主義の未来が目の前に広がる。(中略) 私は新しい人間になりたい。毛沢東時代の良い学生になりたい。私は集団と組織に絶対に服従する」と日記に綴り、時代の要請に応えようとしている⁴³。

思想改造終了の二箇月後、青年 S はようやくやや離れた立場から、批判的に共青团の組織活動を眺めるようになった。12月20日の学生会の改選について、青年 S は違和感をストレートに表現した後、自由な人間になりたいという気持ちを吐露している。「今の学内は、果たして民主が実現できると言えるのか。なぜ(大学側が)重点的に推薦した候補者は漏れなく当選したのに、それ以外の候補者は一人も当選しなかったのか。学内の全てが共青团に牛耳られているのを見ると、何とも言えない気持ちになる。(中略) これからは大事な学業に専念し、余計なことに関わらない自由な人間になろう」⁴⁴。

青年 S の積み重なった反省から生まれた政治運動への懐疑的視線は、一週間後の大組長任命によって一掃される。任命を受けるにあたって、青年 S は「この光栄な職務の任命は、ここ数週間の努力の結果であり、自分の希望を叶えてくれる。若者に難しいことはない。これから勉強と仕事に一層励んでいこう」と、それまでの苦悩をふたたび前向きに捉えようとしている⁴⁵。

3.3 政治運動の衝撃

思想改造と三反五反運動は、青年 S に重い精神的衝撃を残した。それは一体どのようなものであろうか。

その考察に入る前に、高華と張濟順の研究を概観しておきたい。高華の『赤い太陽がいかに昇ったか』は、1940年代初頭の延安の整風運動をテーマにしたもので、「裏切り者」や「スパイ」の嫌疑をかけられ、拷問を受け、精神的に追い込まれていく中共幹部について知ることができる。幹部の中には、絶望の淵で自殺の道を選ぶ者も珍しくなかった⁴⁶。高によると、容疑をかけられながら、厳しい尋問から生き残った幹部らの大多数は再び人民の一員として認められたことに感激し、中共に対する忠誠心をより強めたという⁴⁷。その結果、中共組織に無条件に服従するという心理が幹部の間に普遍化していく。冤罪を着せられた幹部らは、自らの意思で延安に赴いて革命に身を投じたことから、不当な扱いを受けた場合には、中共組織の信頼を勝ち取る以外に出口はない。なぜなら、中共が発動した整風運動の合理性に疑問を呈しようものなら、自らの初心を否定することになってしまうからである。

また、張濟順の『遠去的都市：1950年代の上海』によると、1950年代の著名な知識人が思想改造に遭った時、やむなく考えを改め、中共政権の要請に応えようとしたケースが多いという。その背後には、政治的圧力のほかにも複数の要因が挙げられる。例えば、新聞社の経営者や編集者の場合、中共政権から経済的支援を打ち切られるとただちに経営不振に陥ってしまうという無視できないほどの経済的圧力があつた⁴⁸。

一方、大学生の思想改造は、青年 S のような関係者が政治的圧力をつねに受けるという点で上記と共通するが、圧力の程度は小さいほうである。思想改造の渦中にある青年 S を最も悩ませたのは、立身出

世と自由の二者択一という問題である。

思想改造は自己批判と他者批判の二つを常套手段とする。前者は常に個人の人格否定に繋がるものであり、後者は良好な人間関係を破綻させるものである。青年 S は向学心があり、当初は思想改造に意欲的だったが、やがて自己批判と他者批判がもたらす人格否定の苦痛に耐えられなくなっていった。一時期は、集団に無条件に服従すべきという新時代のイデオロギーに追随することを心に決めたが、同級生らが功名心にはやる一面を見て幻滅する。

整風運動の中共幹部とは異なり、青年 S には元の世界に戻り、技術屋として生きるという逃げ道があった。この発想が幾度となく青年 S の気持ちを楽にすることができた。

このように思想改造を経験した後、青年 S の中に一種の矛盾したパーソナリティが形成されたように窺える。思想改造の不条理さに気付きながら、問題の在り処がつかめず、苦悩を続けていた。一方、上昇志向は絶えることがなく、そのため、大学の政治運動に参加することや、学生幹部になることを完全には諦めなかった。

4. ソ連文化との出会い

1950年代、中ソ友好交流という名で、中共が推し進めたソ連文化キャンペーンは、主として映画、文学、大衆向けのイベント（宣伝ポスター、展示会）という幾つかの形態を通じて展開されている。その中で、映画は識字率に関係なく老若男女に好まれるため、最も重宝されるプロパガンダ手法となった。

4.1 ソ連映画

中国で公開される外国映画の種類は、1950年を境に急激に変わる。1950年までは、都市部の知識人やホワイトカラーの間で、アメリカ映画が好まれていた。ところが、朝鮮戦争の勃発を受け、米中両国が敵対関係となったことで、アメリカ映画は中国市場から追い出される⁴⁹。他方、中国本土の映画会社も製作方針などをめぐり、中共との間に建国初期より緊張関係が続いていた⁵⁰。こうした中で、ソ連映画が中共の支持を受け、耳目を集めるようになる。1949年から1957年までの間に公開されたソ連映画は約800本に上り、同時期の外国映画の3分の2を占める⁵¹。これらのソ連映画は、娯楽性の充実とプロパガンダの両面で絶大な効果を発揮した。

中国で公開されたソ連映画は、幸福な日常生活、英雄の物語、社会主義建設の輝かしい軌跡という三つのタイプが主流だった。これらのソ連映画に対する中国人の受容について、先行研究は主に雑誌や新聞の記事に依拠している。当然のことながら、当時は、ソ連に学ぶという風潮ただ一色であったため、雑誌や新聞記事で紹介され読者の感想は、押しなべて「大いに感動した」、「ソ連への憧れが強くなった」といった類いのものであった。したがって、人々による受容の多様性や、個々の認識と絡み合った心の動きが当時の雑誌新聞記事に十分に反映されていない。

映画愛好家の青年 S はこの時期、たびたび映画館に足を運び、ソ連映画を鑑賞し、多数の感想を日記に残している。注目すべきは、青年 S は1951年時点と1952年時点の感想が、大きく異なることである。

1951年時点では、青年 S は気ままに一人で映画館に出かけ、ソ連映画を鑑賞することが多かった。そのことも関係してか、公式のイデオロギーに同調するような感想は少なく、代わりに独自の視点か

ら述べられることがしばしばである。5月2日、友人とともに見た「党証」について、まず粗筋を次のようにまとめている。ある男が、過去の悪事からスパイという正体がばれ捕まった。続く感想は、悪事を働いた人間は、いずれ懲罰されるべきだという正義論のような内容ではなく、(男が捕まったことからわかるのは)「昔のソ連は、至るところに強力な組織をはりめぐらしたような、力強い国でもなかったようだ」というものであった⁵²。ソ連イメージの向上を狙う中共政権にとっては、意外な反応かもしれない。

6月21日、大学での「遊連英雄(英雄ゲリラ)」鑑賞後には、青年Sは祖国を守り抜いた主人公のゲリラ戦士を英雄と絶賛する。特に、戦士たちが陣頭で宣誓したシーンを取り上げ、「やばい!」という若者言葉で、興奮を表している。ここには、プロパガンダを額面通りに受け止めるというよりは、戦争の場面に血が騒いだという若者の素直さが現われている⁵³。

9月4日、友人と連れ立って、コーカサスを舞台にした「勇敢な人」を鑑賞する。この映画については、アメリカの西部劇と同じように陽気であり、ソ連映画の撮影技術やソ連人のライフスタイルが、アメリカとあまり違わないと語っている。ここからわかるのは、青年Sがソ連映画を批評する際、アメリカ文化を基準にしているということである。アメリカ映画に似ているために、この「勇敢な人」は評価されたが、仮に似ていなければ、評価されなかった可能性は十分にある。したがって、欧米文化が都市部の若者層に浸透し、ソ連文化を受け入れる際の物差しの一つとなっていたと考えられる⁵⁴。

11月17日には、映画館で一人、「幸福な生活」を鑑賞している。「幸福な生活」は、イバン・ペリアア(Ivan Pyriev)が監督を務めた作品で、農村の若者たちの幸せな生活が描かれたものである。同映画は、1951年後半に中国で初めて公開され、以降5年間に渡り各地で上映されるほどの絶大な人気を博した。映画に登場するソ連の若者たちの豊かな生活ぶりが、幸福な社会主義国家のイメージとして映り、多くの中国人にとっての羨望の的となったのである⁵⁵。

青年Sの感想には、二つの傾向がある。一つは、他の観客と同じように、ソ連の若者の豊かな生活ぶりを賛辞するものである。もう一つは、近頃スーツを着ることが気まづくなったと、嘆くものである。青年Sは元来、たった一足の革靴を求めるために、商店を隈なく回るほどの、欧米流の消費志向を持っていたことは既述の通りである。1951年の年末より、欧米的な消費文化を否定する空気が社会に広がり、青年Sはスーツの着用を控えざるを得なくなるが、快く思っていたわけではない。ソ連映画の光景と中国社会のギャップは、皮肉にも青年Sの不満を刺激する形となった。このことは、すべてが中共政権の思い通りに動いたわけでないことを示している⁵⁶。

1951年の1年の間に見た上記4本のソ連映画から、青年Sはソ連に対する様々な印象を感受している。しかし、あくまでアメリカ映画を基準にソ連映画を鑑賞しており、中共政権の意図するプロパガンダとは相当の距離があった。

1952年に入ると、青年Sの映画志向に変化が生じた。5月14日、学校行事の一環として、同級生らとともに東ドイツ映画「毎日の食糧」を見る⁵⁷。日記には、「労働は創造の源泉であり、そして廃墟を理想な社会主義世界に変えることもできる」という感想に続き、主人公のことを「腐りきったブルジョア意識の持ち主」との批判を記している⁵⁸。この時点で、青年Sは既に「社会主義」と「ブルジョア」という用語を使い、世の中を二分させ対立的に捉えている。このことは、三反五反運動の影響と見てよいだろう。

6月15日には、ゴーリキーの自伝映画「幼年時代」を一人で見ている。同映画については、「人間の成長にとって、環境の重要性をよく認識できた」などの感想を述べている⁵⁹。ゴーリキーの映画に魅了されたのだろう、翌日同級生を誘って、ゴーリキーのもう一つの自伝映画「世の中へ」を見に出かける。そして、「意志の大切さを認識できた映画だ」という感想を残す。1950年代以降、社会主義リアリズムの手法の創始者であるゴーリキーの作品が、中国に広く紹介されるようになった。苦難に満ちたゴーリキー自身の実体験を基にした、二つの成長物語についての青年Sの反応は、まさに中共政権が理想とした模範的なものと言える。

1952年の日記に、「人民の戦士」という国共内戦を題材とした、中国映画についての記載がある。「主人公の劉興は、自分の故郷は解放されたが、多くの人々は自分の故郷がまだ解放されていないから、革命を最後までやり遂げると誓った。これは偉大なプロレタリア人民の戦士だ。とても度量が大きい。彼らを模範にしてしっかりと学んでいこう」。このように、「解放」や「革命」という中共の言葉を何の躊躇もなく使いこなすようになり、国共内戦に対する中共側の意図を自然に受け止めているようである。学校行事の一環として同映画が上映されていることから、青年Sと同様の認識に辿り着いた学生は、少なくないと考えてよいだろう。

1952年に生じた変化は、学校行事で同級生らとともに映画を鑑賞したことと、大いに関係しているように思われる。これらの映画を通じて、青年Sに中共のプロパガンダや価値観が、少しずつ滲透していったのである。

4.2 逃したソ連留学

1950年代以降、東西陣営の対立を受け、中国人の留学先は、従来の欧米諸国から社会主義同盟国へと限定される。1950年代の10年の間に、総勢1万人の学生がソ連に派遣された。そのうち、帰国後に中堅幹部として活躍した者もいれば、後に国家レベルの指導者になった者も、かなりの数に上っている。当時のソ連留学は、毎年全国から1千人しか選ばれないほどの狭き門で、超エリートの出世コースとも言える。

この幸運を手にする可能性が、一度だけ浮上した。H国立大学における思想改造も終盤に差しなかった、1952年8月のことである。8月1日、一年生から10名の学生を選抜し、ソ連に派遣するとの通知が大学から届いた。当初、政治運動の実績が振るわないことから、青年Sは応募を諦めるつもりでいた⁶⁰。しかし、諦めきれずに翌日、募集要項をもらって確認すると、仕事と学業面で積極性を持つこと、組織生活において高い協調性を有すること、努力する意志を強く持つことが、応募条件として提示されていた。躊躇ったのは、候補者の政治的素質を優先するとの記載があったためである。最終的には、同級生からの勧めで、どうにかこうにか応募の決意を固めている。

日記には、「勝算は低いかもしれないが、最善を尽くしたい」とあり、応募に意欲的だったことが窺える。応募書類には、仕事と学習はまだ十分でないが、国を愛し、人民に奉仕したい気持ちは揺るぎないものであると書き、懸命にアピールしている。また、書類を提出してからも、気分はなお高揚していた。

ソ連への憧憬は、この時代の若者に普遍的に見られる。憧れの感情は、どのようにして若者の中に定着し得たのか。西側諸国への留学の道が絶たれ、ソ連と東欧諸国に限定されたことの影響は大きいだろう。また、一連のソ連文化の推進も指摘できよう。文化推進の効果について、日記に二つの実例

が挙げられている。一つは、知識人、教育関係者、学生を主な読者とする新聞『文匯報』に掲載された、「モスクワからの手紙」と題するエッセイを読み⁶¹、若い著者によるソ連への憧れに強く共感した、というものである⁶²。

もう一つは、1952年4月16日、十校の大学が合同で開催した集会での出来事である。参加者全員に向けた、華東師範大学の学生代表による「上海から北京、北京からモスクワに目線を向けるように、広い視野をもつように」という呼びかけを聞き、青年Sは興奮を禁じ得なかった、というものである。このように、進歩の象徴としてのソ連は、当時の大学生の間に確実に存在感を増していった⁶³。

青年Sは結局、ソ連留学の候補に選ばれなかった。9月と10月の日記が散逸しているため、不合格の理由や経緯は推察するほかない。学業成績がトップクラスだったにも関わらず不合格だったとすると、その理由が学業以外、すなわち自身も懸念していた政治面にあったとしても不思議はない。関係者によると、当時のソ連留学の選抜基準として、専門知識や語学能力より、政治的忠誠心が優先されたという⁶⁴。想像の域を出ないが、大学の思想改造で、周囲からの厳しい批判に耐えられず、精神的に動揺したことが問題視されたのではないか。期待が大きかっただけに、絶望は相当なものであったろう。

4.3 中ソ友好月間キャンペーンにおけるソ連文化との出会い

1952年末の中ソ友好月間キャンペーンは、青年Sにとって特別な意味を持つ。それまではソ連文化とは映画、文学、新聞記事などの媒体を通じた間接的な接触であったが、中ソ友好月間キャンペーン中に、初めてソ連人と直に触れ合うことができたのである。このような経験によって、青年Sはどのようなソ連イメージを得たのだろうか。

中ソ友好月間キャンペーンは、ソ連に学ぶ気運を高めるために、中共政権が全国規模で実施したものである。キャンペーンの目玉は、ソ連代表団と中国人の交流イベントである。一箇月間で、総数300名に上るソ連代表団が中国各地を訪れ、座談会、講演会、芸術公演を行い、中国人との交流を盛んに展開した。これらのイベントに参加した上海の一般市民は、18万6千人に達する⁶⁵。

青年Sは大学生だったため、機会に恵まれた。11月25日、H国立大学の学生代表として、同級生らとともに40名余のソ連人訪問客を囲む交歓会に参加する。

夜の9時15分より深夜12時まで開催した交歓会のハイライトは、何と社交ダンスであった。青年Sがダンスの才能を発揮できる絶好の機会である。そもそも青年Sが代表に選ばれたのは、こうした面が考慮されたためのものである。青年S自身は、交歓会への参加を「神聖な職務」として捉えている。

鮮烈な思い出となっているのは、ソ連の若い女性とダンスをしたことだった。青年Sの予想に反して、女性からダンスに誘われる。男性の方から声をかけ、ダンスに誘うという、欧米式の社交ダンスのマナーを心得ていた青年Sは、女性の行動に驚く。瞬時に、これは社会主義国家ソ連の情熱的な若者ならではの流儀だと自らに言い聞かせ、動揺をかき消す。

二人は言葉が通じないため、ダンスの最中に会話することはなく、お互いに相手の名前を聞くことすらできない。その代わりに、青年Sは女性の服装を注意深く観察していた。「彼女は深い茶色のスカートを穿き、ソ連映画の英雄ゾーヤが愛用するブラウスを着て、肩から腰までを二本の白い帯で飾っている。学校の制服だろう。」ロシア人女性のダンスも印象的だった。「彼女のダンスは僕と同じ

レベルだ。我々は、ダンスを通じて気持ちの交流ができた。」しかし、最後の方には未練を滲ませ、この異国の友人と再びどこかで会えるだろうと綴っている。

青年Sは、もともと上昇志向が強い青年だった。しかし、思想改造を経験してからは、矛盾を抱えるようになる。当初は思想改造に意欲的に参加していたが、中共政権が提唱するイデオロギーと現実のギャップをどうしても埋めることができず、何度も精神的に追い込まれ思想改造に失望したのである。ただし、何かしらの任務を与えられると、嬉々として応じることがあった。このように、政治運動に幻滅しながら放棄はしないという、負のループに陥った青年Sは、自立した人格とはほど遠い。当時の出世が、政治運動への参加に依存していたという現実が、パーソナリティに傷痕を残したのである。

そうした折、交歓会に参加できたことは、ダンスの才能をアピールする機会というより、政治的信頼を再び得られたという点で、意義深いものであった。意気揚々と交歓会に臨んだ青年Sの気持ちは、ありありと感じ取ることができる。他方で、ソ連人に接する機会がなかったために、あるジレンマに直面することとなる。つまり、与えられた仕事の重要性は理解しているが、いかに任務を全うすることができるかについては、皆目見当がつかないのである。

青年Sとソ連人女性の交流はダンス以上の展開がなかった。この時、ソ連人女性からのダンスの誘いに戸惑いを感じながら、それをポジティブに捉えようとしたのは、万事順調に進め、任務を全うしたいという気持ちの表れであろう。

青年Sの目に映ったソ連人は、いったいどのような印象だったのか。日記に記されているのはソ連人女性の服装のみで、それ以外の情報は一切ない。会話による交流がない状況下では、相手の表情、仕草、容姿、服装などが印象に残るのが常である。青年Sの場合は、服装について詳しく描写されている。これは、洋服好きの面の反映でもあるが、個人の視点から相手を見つめる際、政治的イデオロギーに個人の嗜好が優先することを示唆するものでもある。また、日記の最後に残した「この異国の友人とは、またどこかで会えるだろう」という一節は興味深い。なぜなら、未練を滲ませてはいるが、中ソ友好ムードに流された一種の社交辞令にも聞こえるためである。常識的には、相手の連絡先を尋ねない限り、このような出会いは一度きりで終わるものである。したがって、連絡先を交換しなかったということは、ソ連人との交流を続けたいという意欲が、実はそれほど高くない、あるいは何かしらの事情が引がかかったかのどちらかであろう。いずれにしても、青年Sにとってのソ連イメージを探る上で、重要な一節である。こうした交流は、相互に漠然とした好感を醸成し得るが、相互理解の深化には繋がりにくい。

5. 結論

本稿は、強力なプロパガンダ下での民衆の主体性を焙り出すために、1951年と1952年における青年Sの経験を基に、中ソ友好交流を通じたプロパガンダの青年知識人による受容を考察してきた。

青年Sの中ソ友好交流に対する態度は変化し続けた。1951年当時は、個人的な感覚からプロパガンダの中ソ友好交流を認識していたが、1952年になると、当局の公式見解に傾倒するようになったのである。それは、心が大きく揺れ動いていたためであり、決して単線的な変化ではなかった。また、1952年後半に公式見解を大幅に受け入れていたが、額面通りのものではなかった。

態度の変化には、いくつかの要因がある。第一に、青年 S 自身の上昇志向がある。これは、「立身出世」という中国の伝統的価値観と言い換えることができる。それを証拠に、青年 S は思想改造に積極的に取り組み、ソ連への留学やソ連代表団との交流にも進んで参加しようとしている。

第二に、青年 S の欧米文化志向がある。実際、ソ連文化に接する際、近代西洋の文化を基準に評価をしていた。青年 S が経験したソ連映画鑑賞とソ連代表団との交流からは、欧米文化という参照軸によって、ソ連イメージが相対化されるという構図が見て取れる。

第三に、思想改造などの政治運動が、青年 S の人格に一種の矛盾をもたらし、精神的基盤をより複雑化したというものである。

これらの三つの要因が相互に作用した結果、強力なプロパガンダに対して、自ら価値判断を行いつつながら、それを受け入れようとした。青年 S の事例から読み解くことができたのは、民衆の主体性を維持可能にしたものとは、個人の信念や価値観に基づいて思考し、行動する多くの人々の存在だったということである。

(本研究は基盤研究 (C) 17K03149 と早稲田大学 2018 年度特定研究課題の助成を受けたものである。記して謝意を表したい。なお、本稿の作成に当たって、河野正氏、石岡亜希子氏、呉茂松氏より貴重なご示唆をいただき、感謝を申し上げる。)

註

- ¹ 誤解を避けるために少し補足しておきたい。この多様な受容とは、言論の自由が実現された社会環境で、多様な価値観が共存し、多様な言論がつねにぶつかり合う、というような活気に溢れた情景をさすのではない。
- ² 一例に、姜超の博士論文(華東師範大学、2015年)『上海中ソ友好宣伝教育運動研究(1949-1965)』がある。
- ³ 研究者間では、1950年代の中国で展開されたソ連のプロパガンダを「中ソ友好交流」と呼ぶのが一般的である。これは、文記東の著書『1949-1966年の中蘇文化交流(中ソ文化交流)』(黒竜江大学出版社、2011年)のタイトルだけでなく、『脆弱の連盟——冷戦と中蘇関係』(社会科学文献出版社、2011年、p.5)の主題設定にも拠っている。国際シンポジウム『冷戦と中ソ関係——外交、経済と文化交流』で行われた、22の研究報告を所収した論文集である後者において、中国国内のソ連プロパガンダをテーマにした論文は、「中ソ文化交流」のカテゴリーに分類されている。
- ⁴ 例えば、文・前掲注4、潘鵬「中ソ友好協会の変遷と中ソ関係」『冷戦と中ソ関係——外交、経済と文化交流』・前掲注4がある。ただし、潘の報告は『脆弱の連盟』に収録されていない。
- ⁵ この種の研究としては、以下の論考がある。Donghui He, "Coming of Age in the Brave New World; The Changing Reception of the Soviet Novel, How the Steel Was Tempered, in the People's Republic of China" o Tin Mai Chen, "Film and Gender in Sino-Soviet Cultural Exchange, 1949-1969," Thomas P. Bearnstein and Hua-Yu Li Edited, "China Learns from the Soviet Union, 1049-Present", Lexington Books, 2009.
- ⁶ 余・姜論文では、中ソ友好交流以前と以後の二時点が比較されている。それは、公文書の限定性に起因している。つまり、民衆の対ソイメージを中共政権が調査する場合は大抵、中ソ友好交流の実施前と実施後にしか行わず、二時点の比較を通じて効果の如何を測るとというのが一般的であったということである。このような史料の制約の下では、対ソイメージが好転したか否かという二者択一的な議論に陥りやすい。
- ⁷ 1950年代、政府機関、外郭団体・組織の公文書には、ソ連に関わる文書が多数掲載されている。それらは、現状報告のほか、民衆の不適切な言論への対応策も含む。いずれも、民衆の対ソイメージが重視されていることを物語っている。
- ⁸ 文化大革命を代表とする急進的な革命路線が行き詰ると、社会に潜んでいた多様な価値観が表出する。それは、旧来的な体制から脱却し、新たな秩序を模索する支えとなり、1970年代以降のダイナミックな変貌を導いた。
- ⁹ 姜超の研究によると、1957年の中ソ友好月間キャンペーンを受け、ソ連に対する批判や否定的な言論が消えたという。この現象について、当時の反右派運動とともに、社会全体を支配していた政治的圧力に民衆が屈した結果だと、姜は解釈している。このような解釈は、姜自身が否定しようとした、中共政権が民衆の態度を一変させたという、従来の図式を支持するような形になってしまっている。
- ¹⁰ 鄭成「1950年代初期における中ソ間の文化交流—上海の中ソ友好月間キャンペーンを中心に—」アジア政経学会『アジア研究』第61巻1号、2015年5月。鄭成「中ソ友好・交流と中国人の対外意識への影響」総合学術誌『アリーナ』第20号、2017年11月。鄭成「建国初期の科学研究者によるイデオロギー宣伝協力についての一考察」早稲田大学アジア太平洋研究

中ソ友好交流をめぐる中国青年知識人のプロパガンダ受容について

センター『アジア太平洋討究』第30号、2018年2月。

- 11 1953年時点で、大学入学年齢にあたる18歳人口は全人口の0.7%、そのうち現役大学生数が占める割合は0.4%であった。なお、18歳人口は中国社会科学院人口研究中心『中国人口年鑑』編集部編『中国人口年鑑』1985年版(中国社会科学出版社、1986)600頁、現役大学生数は、中華人民共和国教育部計劃財務司編『中国教育成就一、現役大～1983』(人民教育出版社、1984)68-72頁を参照。
- 12 これは、著名な知識人が社会的な影響力を有するほか、多くの文字資料が現存しているためだろう。数年前より筆者は知識人についての調査研究を行っているが、入手した資料のうち、大半が著名な知識人に関するもので、青年知識人に関する体系的な資料は限られる。
- 13 青年Sの日記は、復旦大学の張樂天教授が主任を務める、当代社会生活資料センターに保管されている。閲覧許可は、張教授の厚意による。日記は個人の自己記録である以上、自己美化の要素が入りやすい。筆者から次の二点からこの日記の信憑性が高いと見ている。その一つは、青年Sが日記の中に自らの性的行為について、やや曖昧な筆調で記述している。性に関する話題がタブ視されていた当時の保守的な社会雰囲気を探ると、日記で自分の性的行為をここまで詳細に記述したのは、自分のすべてを日記でさらけ出すことを意味する。青年Sが日記で美しい自分を作ろうとした気配が見られない。また、強引な自己弁護はこの日記に見られない。もう一つは、青年Sが日記に言及した特定の事柄が確認できたこと。例えば、青年Sが1952年に新聞紙の読者投書コラムに偽名を使いエッセイを発表したことが、筆者は新聞紙面でその確認を取れた。
- 14 青年Sは、自分自身のプロフィールについて、履歴書のように時系列に沿って詳細に記載しているわけではない。そのため、筆者が断片的な情報を総合し、推測を加えている。
- 15 1951年9月10日付の日記を参照。
- 16 1951年1月26日付の日記を参照。
- 17 1951年3月14日付の日記によると、送別会に出席しなかったことについて、授業の課題が多く、体調が優れていないことを理由として挙げている。ただし、もともと出席の意思がそれほど強くなかったことが行間から窺える。
- 18 1951年4月末付の日記「今月の反省セッション」を参照。
- 19 楊奎松『中華人民共和國建國史研究1』江西人民出版社、2009年、pp. 239-245。
- 20 関連ページ数を入れる。
- 21 張濟順「上海私營報業體制變革中的思想改造運動」華東師範大學中國當代史研究中心編『中國當代史研究(一)』九州出版社、2011年、pp. 46-87。
- 22 沙文漢「關於大學思想改造運動的文匯報」(1952年5月7日)華東師範大學中國當代史研究中心編『沙文漢工作筆記1949-1954年』中國出版集團、東方出版中心、2015年を参照。本手記は、当時の浙江大學の思想改造の現状について、浙江省人民政府副主席兼教育庁長を務める沙によるものだが、各大学に存在していたと推察される。
- 23 1952年3月28日付の日記を参照。
- 24 1952年6月9日付の日記を参照。
- 25 1952年6月14日付の日記を参照。
- 26 1952年6月17日付の日記を参照。
- 27 馮契マルクス主義的立場を取った哲学者(1915年～1985年)。1935年、清華大學哲學部に入学、1937年、日中戦争の勃発を機に延安に赴き、中國共產黨が創立した魯迅藝術學院に入学する。マルクス主義哲學に接したのは、その頃のことである。西南連合大學に復學してからは、西洋哲學を専攻する。1947年、上海に移り、同濟大學などで中國哲學史の講義を担当する。その間、H國立大學の哲學講義を兼任している。1951年の馮の政治學講義は、青年Sら學生にとって、マルクス主義に開眼するきっかけになったと考えられる。知識人を対象とした思想改造運動で、馮は學生に徹底した自己批判を行うよう激励する。そのうち、馮自身も厳しい自己批判を行うことを余儀なくされ、反省文を書くことになっている。後に華東師範大學マルクス主義教研究室に異動し、そこで研究者人生を送った。
- 28 1952年6月21日付の日記を参照。
- 29 1952年6月23日付の日記を参照。
- 30 1952年6月18日付の日記を参照。
- 31 1952年6月19日付の日記を参照。
- 32 1952年7月5日付の日記を参照。
- 33 1952年7月28日付の日記を参照。
- 34 1952年7月30日付の日記を参照。
- 35 1952年8月6日付の日記を参照。
- 36 1952年8月8日付の日記を参照。
- 37 1952年8月11日付の日記を参照。
- 38 1952年8月13日付の日記を参照。
- 39 1952年8月15日付の日記を参照。
- 40 1952年8月16日付の日記を参照。

- ⁴¹ 1952年8月25日付の日記を参照。
- ⁴² 1952年9月13日付の日記を参照。
- ⁴³ 1952年9月30日付の日記を参照。
- ⁴⁴ 1952年12月20日付の日記を参照。
- ⁴⁵ 1952年12月26日付の日記を参照。
- ⁴⁶ 高の著書以外に、筆者自身も延安整風運動の経験者から体験談を聞いている。詳細は村嶋英治・鄭成『中国に帰ったタイ華僑共産党員：欧陽恵氏のバンコク、延安、大連、吉林、北京での経験』早稲田大学アジア太平洋研究センター、リサーチ・シリーズ No. 1, 2012年に譲る。
- ⁴⁷ 高華『紅太陽是怎样昇起的：延安整風運動的来龍去脈』香港中文大学出版社，2000年。
- ⁴⁸ 張濟順『遠去的都市：1950年代的上海』社会科学文献出版社，2015年。
- ⁴⁹ 楊奎松「新中国成立初期清除美国文化影響的經過」『中共党史研究』2010年第10期。
- ⁵⁰ この時期に上海の中国系映画会社が制作した映画については、右の文献に詳しい。Paul Clark, *Chinese Cinema, Culture and Politics since 1949*, Cambridge University Press, 1987.
- ⁵¹ 陳庭梅「蘇聯電影的引進及其塑造毛沢東時代中国的意義」沈志華ほか編『脆弱的連盟 冷戦与中蘇関係』社会科学文献出版社，2010年，pp. 145-146。
- ⁵² 1951年5月2日付の日記を参照。
- ⁵³ 1951年6月21日付の日記を参照。
- ⁵⁴ 1951年9月4日付の日記を参照。
- ⁵⁵ 中国の映画雑誌『大衆映画』（1951年第29号）によると、映画「幸福な生活」の劇中で、おしゃれな洋服を纏っているソ連人女性を見て、中国人女性が羨ましがっていたという。陳庭梅「蘇聯電影的引進及其對塑造毛沢東時代中国的意義」沈志華ほか編『脆弱的連盟』社会科学文献出版社，2010年，p. 153。
- ⁵⁶ 1951年11月17日付の日記を参照。
- ⁵⁷ 「毎日の食糧」は、1949年に東ドイツが制した映画で、1952年に中国の東北映画制片廠によって、中国語版が制作された。その内容は、戦後の廢墟の中で、悲惨な物質生活を乗り越えたあるドイツ人家族の物語である。
- ⁵⁸ 1952年5月14日付の日記を参照。
- ⁵⁹ 1952年6月15日付の日記を参照。
- ⁶⁰ 1952年8月1日付の日記を参照。
- ⁶¹ 『文匯報』1952年4月10日。
- ⁶² 1952年4月10日付の日記を参照。
- ⁶³ 1952年4月16日付の日記を参照。
- ⁶⁴ 当時の留学経験者によると、モスクワに向かう列車に乗車してから、ロシア語をキリル文字から勉強し始める中国人留学生は、決して珍しくなかったという。李喜所主編、田濤、劉曉琴著『中国留学通史（新中国卷）』広東教育出版社，2010年，p. 103。
- ⁶⁵ 上海档案馆，C38-2-2-138，華東暨上海外資招待委員會「招待四個蘇連代表团的總結報告」1952年12月15日。